しかはま自然観察会
# のらえもん
2025年度
No. 8
2025.10.18~19
『　人も　自然も　みんな友だち　』

第８回活動　思い出の藤原を訪ねる

６年前の２０１９年１０月１９～２０日以来の訪問です。
その時は、お世話になった民宿関ヶ原への感謝の気持ち
を現すものでした。
今回は、たくさんの思い出をつくってくれた藤原への郷
愁感がありました。
女将さんも空（くう：犬の名前）ちゃんも、みんな元気
でした。そして、散策した奈良俣ダム・雨呼山・上ノ原・
応永寺のどれもが、私たちを温かく迎えてくれたのでした。

１，日　時：２０２５年１０月１８～１９日　一泊二日

２、天　気：二日間とも晴れ
朝　１４℃　　昼　１８℃　　夜　１４℃

３，場　所：１日目・・・谷川岳ロープウエー　天神平散策
２日目・・・藤原　奈良俣ダム・応永寺・雨呼山・上ノ原散策
山口さんの別荘見学

宿泊関ヶ原　みなかみ町藤原３５２７－３
電話　０２７８－７５－２１３２

４，交　通：ヨツバ観光バス

５，参加者：総数１３　　内訳　大人　１２
小学　　１

６，活動の様子
参加者がどんどん減る。学校行事と重なっていた、ピアノの発表会だった、体長不良、などと連絡が入った。
「これでは、実施できなくなるのでは？」と、心配になってきた。その上、バス代の値上がりとゆめ基金からの調査の連絡があり、ゆううつな時間が迫ってきた。

「ケセラセラ」なるようにしかならないと腹をくくり、「藤原を楽しむ」ことにした。

**１日目（１０月１８日）晴れ**

○ 谷川岳ロープウエー

土合口駅（山麓駅）標高７４６㍍

↓

天神平駅標高１３１９㍍

↓　気温１４℃　雨の心配はない。

ここで、散策組と登山組に分かれる。

分岐点まで３０分、天神山まで３０分の山歩きだ。

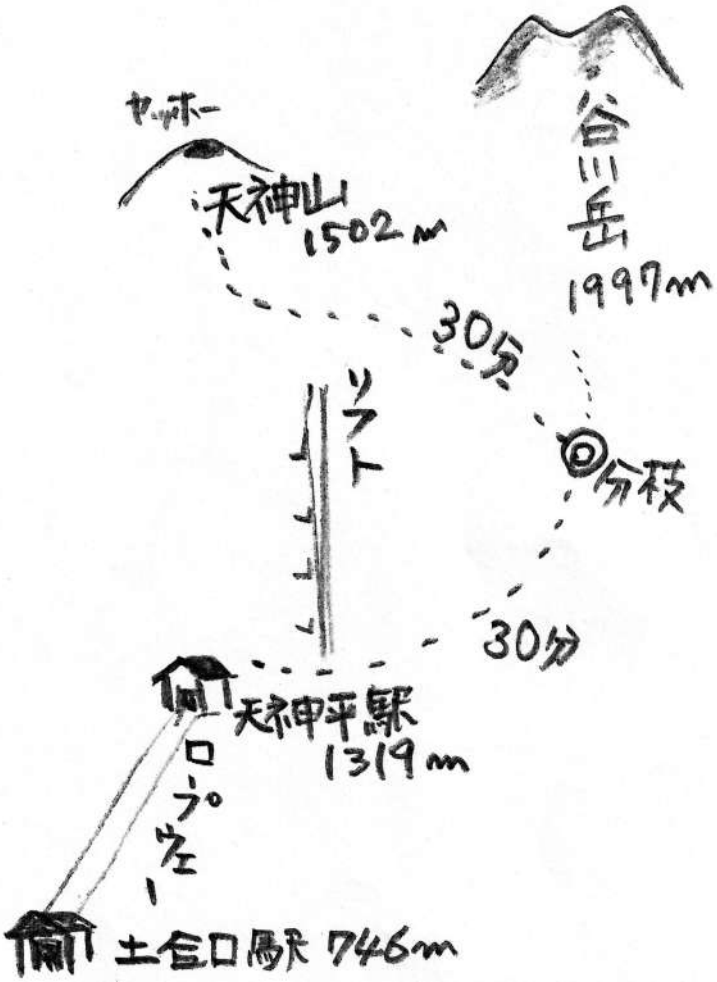
谷川岳の双耳峰が見えてきて気分はクライマー！

天神山標高１５０２㍍

ここからの展望は最高！

藤原の盟主武尊山も見える。

ここで昼食。山の空気はウマイ！




天神平駅前で記念写真。１３人のいい顔

赤・黄などの紅葉もいっしょだ。

１４：３０いよいよ藤原に向けて出発。

○ 奈良俣ダム

観光バスが２台も止まっている。こんな光景は初めてだ。また、いつもなら水を満々と貯えているのに、茶色い側壁が周囲を囲んでいるのだった。

直径８㍍の大きなタイヤの前でハイパチリ！

○ 民宿関ヶ原

１６：１０懐かしき関ヶ原着。番犬空（くう）ちゃんが眠そうな目で出迎えてくれた。女将さんたちも大歓迎！

１８：００からの夕食は宴会を兼ねている。

いつもながらの心のこもった料理が沢山。「この鍋なんだと思う？」「熊肉だよ。何回も茹でこぼし、ショウガで臭みをとってあるから、おいしいよ！」と、女将。

熊を、田んぼに仕掛けた檻で捕まえたという。

熊肉を食べて、みんな元気溌剌！

自己紹介をしながらの会食は、なごやかで本当に心温まる時間でした。そして、楽しそうに話しているみんなの表情は生き生きしているのでした。

唯一の子ども勇くんは、一人でも大きなパワーを私たちに与えてくれました。

食後は、星空の観察を楽しみにしていたのですが、ポツリポツリときました。あしたは雨かな？

２日目（１０月１９日）晴れ

夜中の雨音はすっかり消えて、絶好の紅葉日和です。

朝の散歩で、近くを歩いてみました。

「６年前は、こんなんではなかったな！」と、ある異変に気づきました。

まず、人の気配がしないのです。時折、カッコイイ車が通ります。家もあります。が、人の姿はありません。声も聞こえません。

さらに、田んぼだったり花壇だったりした所が少なくなり、葛の蔓が道にまでのびてきています。背の高い草が生え、イワナが釣れた小川にも近寄れません。木々は大きくなり、日影を作って道にまで覆い被さってきています。

人の手が加わった部分が減少し、自然の生きようとする力がどんどん増大しているようでした。

人と自然とのバランスが逆転してしまったようです。

これでは、熊は「オレの領分」と思ってしまうのではないでしょうか。

そんなことが脳裏をかすめる散歩になりました。

○ 朝食７：３０

勇（ゆうき）くんの「いただきます」で、棚田米の朝食。美味しくて、沢山食べてしまいました。大家族での食事は、何度味わってもいいものです！

○ （応）永寺参観

山口さんのおかげで、急遽、みんなで応永寺へ歩いていくことになった。

この寺は、雨を呼ぶ龍伝説で有名である。

応永寺は、応永年間（１３９４年～１４２８年）の建立と言われ、天台宗から後に曹洞宗にかわる。

雨呼山の由来

山間の田畑に日照りが続けば、山の水が涸れて作物は全滅の被害を受けてしまう。

藤原村の人々はこの災害を避けるために、村の中央にある「雨呼山」に登り、大きな声で天に向かって雨を呼んだ。

時には、麓の山寺より太鼓を担ぎ出して叩き、雷神の雲を呼んだ。

やがて、照り輝く青空も一転、にわかにかき曇り、雷鳴とともに雨が降り出したのだった。

そのおかげで、秘境の地藤原村は、五穀豊穣・平穏無事の生活ができたのだった。

また、ある時、麓の山寺の本堂にあった彫刻の「龍」が、夜中に寺を抜け出し、寺山峠からこの雨呼山に登り、山頂の三つの岩山であばれた。

そのために大嵐となり、大水により山津波が起き、村や田畑を埋めてしまった。

困り果てた村人たちは、寺で眠っている龍を縄で縛り上げ、寺の本堂に吊してしまった。

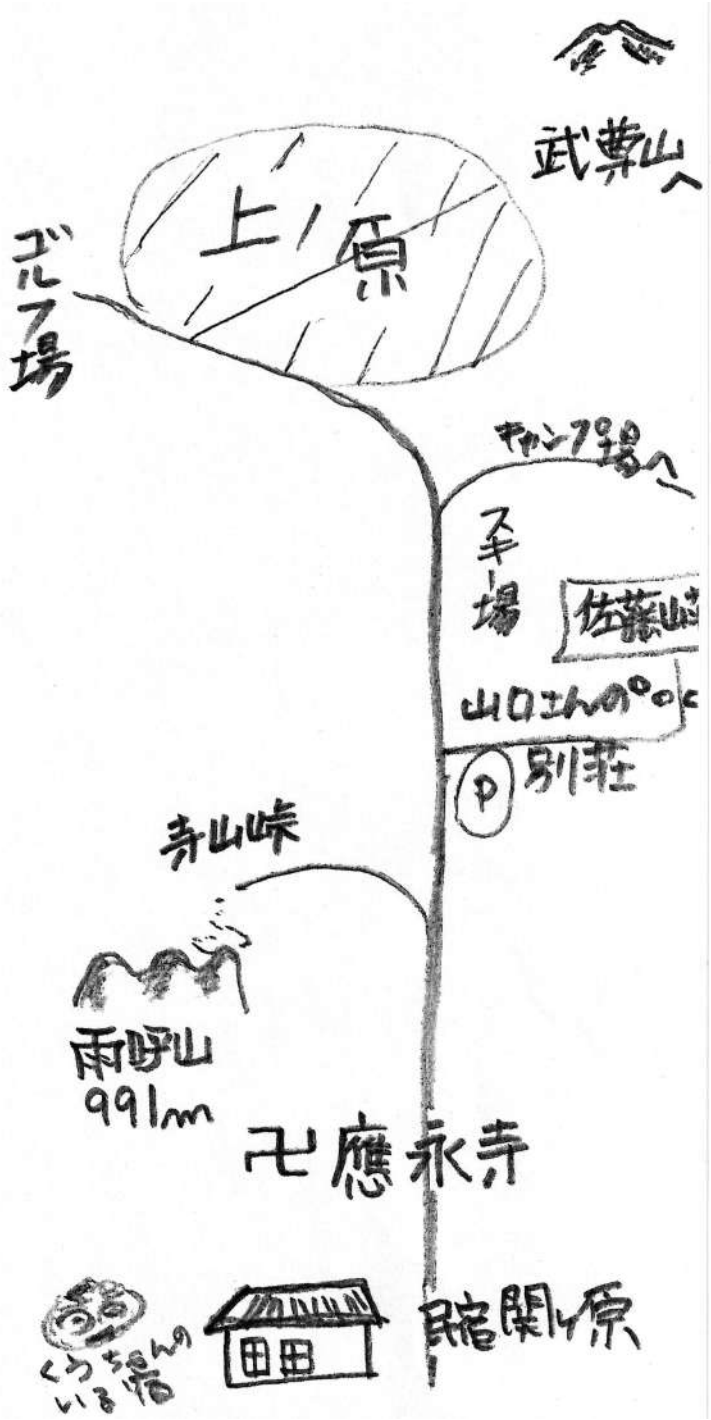
今も、応永寺に伝わる話しで、縛られた龍は本堂の正面天井近くにある。

○ 雨呼山９９１㍍散策
のらえもんが利用していた古民家の方から登りたかったが、熊や老人の事を考え、寺山峠まで全員でバスで行き、そこから歩くことにした。
クロモジの多い道を歩く事３０分、雨呼山に着いた。眼下には棚田の広がるのどかな里山が見える。この真下に私たちが宿泊した関ヶ原である。
ここも、草ボウボウである。

○ 上ノ原
斜面全体が白い穂の揺れるススキの原た
その間を、みんなで歩いていく。
毎年４月に野焼きする効果だろうか。
ススキから突き出る幼樹は見あたらない
湧水は涸れそうだった。
と、「カモシカがいる！」。近づいても逃げようとしない。

○ 山口さんの別荘・・・佐藤山荘・・・
民宿吉野の上にある駐車場の近くだ。
昔は木一本なかったというが、今は色々な大木が繁る中に古びた小屋があるだけだ。池が三つあり、イワナの養殖によさそうだった。

○ 昼食はカレーライス
ここのカレーは美味しい！おかわり自由
肉は、熊ではなく豚だった。




○ さよならの記念写真
空チャンも一緒。３年後の再会を約束して、バイバイ！と手を振ってきました。

７，ふり返りの感想

○ 山がおおきかった！
イワナをつかまえたかった！

栗島小２年

○ とても充実した２日間でした。
義務教育ではできない学びを、親子で深めることができました。
家族だけだと登山とか土地に対する知識や知見がないので、スペシャリストのアドバイスがとてもよかったです。
本当にありがとうございました。
初登山　自然の神秘に　感動だ

○ 応永寺の本堂をゆっくり見学できてよかった。
ニホンカモシカを近くで見れてよかった。
民宿関ヶ原のカレーライス・白米・うめぼし、おいしかった。
部屋・お風呂・トイレ、キレイだった。
宿の人・犬が、優しかった。
１３人、少人数だったので、全員と話すことができて仲良くなれて、よかった。
人の温かさを感じられる旅でした。
ありがとうございました。

○ 藤原の良いところを教えていただきました。
皆さん、ありがとうございました。
すべりあり　ススキゆれるよ　藤原よ

○ 今回は天気も良く、熊にも出くわさず、紅葉も見れて、大満足です。（星が見れなかったのが残念）
参加させて頂き、感謝です。
また、明日から仕事を頑張ります！
じわじわと　おそってくるよ　あいたたた

○ 久し振りの藤原をめぐる旅は、とてもなつかしいところもあり、静かで良かったです。
お子さんの参加が少なくさみしかったですが、ほぼ大人だけの旅もなかなか楽しかったです。
熊に会わなくて良かった。
秋山に　登る楽しさ　熊こわさ

○ 忙しい毎日から少し離れ、自然の中にいるのは心いやされます。
ありがとうございました。
山登りでは、もっと体力をつけなければ皆様についていけないと痛感しました。
あと一歩　それだけ考え　秋登山

中島根保育園

○ １泊の藤原散策。思い出に残ることは色々ありますが、念願の龍にあえたこと、応永禅寺龍の色彩豊かな彫り物、二人でと思っていたら、古民家を止めてみんなで来てくれて、とても良かった。
奈良俣ダムの水量の少なさに、おどろかされた。
佐藤山荘も、見てもらえて良かった。
紅葉たけ（キノコ）採る時間がなくて残念。
みんなでの　ひさびさ藤原（むら）　うれしそう

○　春夏と古民家キャンプの思い出はホタルいっぱい星もいっぱい　　古高　利男

コラム

## 里山と動物　＝熊・鹿＝

令和の熊騒動。連日、テレビ・新聞で報道されている。今日（２０２５年１０月２５日）の朝日新聞を開くと、「クマに襲われ一人死亡」「富山でも７０代重傷」さらに「今年度の死傷者数すでに１７０人」と続く。

６年ぶりに訪ねた藤原では、田んぼに仕掛けた檻でクマを捕獲したという。

その藤原は、６年前と自然環境がすっかり変わっていることに気づいた。空家と耕作放棄地が増えていること、道路は植生が侵入してきて狭くなってきていることだ。さらに道路の両側に育っていた樹木は大きくなり、覆い被さってきている所が多いのだった。

６年前は、藤原の里地里山全体が、もっと明るかった。踏み後をたどって、近くの小川に、イワナ釣りに入れた。雨呼山のルートは、きちんと人の手が入っていた。棚田の畦も、きれいに草刈りをしてあった。

自然の驚異は、少しずつゆっくりと自分たちの領域を作り上げようとしていることだ。そこに逆らって生活している人間は、手を休めればどうなるか、それが「令和の熊騒動」なのではないか。

米の増産盛んな１９６０年代、私の故郷である北海道のど真ん中・東川町の里地里山周辺は、熊・鹿の被害は一片もなかった。

春になると、ワラビ・フキを採りに山に入った。子どもだけでも、夕方でも、山に入った。秋はキノコ狩りと岩魚釣り。父は、旭岳の麓まで出かけ、「熊がいるんだよな」といいながら、たくさんの土産物を持ち帰ってきた。

私が小学生の頃、「山奥に熊が出た」と言って、編成隊をつくり熊狩りに出かけた。村人が見守る中、仕留めた熊は校庭で解体され、肉は等分に配布された。肉は、夕食に出てきたことを覚えている。

「熊は怖い。人を襲う」ことは小さいころから聞かせられていたが、「熊に出会った。人が殺された。」ということはなかった。

だから、村を流れる倉沼川へよく釣りにいった。ドンコ（カジカ）・ドジョウ・ウグイ・ヤマメがよく釣れた。途中の田んぼの畦草はきれいに刈り取られ、川の流れは土手からでも眺められた。

隣りの小学校が運動会という日、お付き合いのために全校で見学に行くのだが、山を二つ越して行った。迷うことのない山道だった。草は、みんな背丈より低かった。ある日、選挙違反調査のためだと言って、刑事が山を越えて来たことがある。

エゾシカは見たことが無い。「大雪山の奥に行かないと、見れないよ」が通説だった。そのエゾシカは、今では田んぼに出てきて稲を食い荒らすという。田んぼは、すべて網を張り巡らし電流を流している。「田んぼで拾った鹿角」が、兄の家に飾られている。

熊も鹿も人里まで出没するということは、生息数が多すぎるのではないか。ならば、生息数を減らす対策が必要だろう。それが共生なのかもしれない。